

テーマ「一人ひとりに合わせた学生支援のために」

1. テーマ選定について

(1) 大学の役割

これからの日本や、多様化した社会を引っ張っていく若者を育て、地域に還元していくことが多くの大学の目的であり、目標となっていることから、大学の役割を「多くの高度な人材（多様化した社会に対応できる人材）を輩出すること」と捉えた。

(2) 役割を果たすために大学がすべきこと

入学時点から学力や意欲に大きな差があるため、学生一人ひとりに適した教育・支援が必要であると考えた。学生の意識改革をし、底上げをすることで、多くのレベルの高い人材輩出が期待できる。

(3) 大学の現状

教職員が個々の学生情報の把握・活用ができておらず、実情やニーズに応じた適切な対応ができていない。また、部署内でのみ情報が共有されており、情報が死蔵している。

(4) テーマ選定理由

「情報の共有」という部分に着目し、個々に適した学生生活を支援することで、現状の課題を克服できないか議論を展開した。そこで、各部署が保有する学生生活情報の共有システムを構築することにより、様々な問題点を解決できることを示していくこととした。

2. 問題点の深堀（現状と課題）

学生が入学してから卒業するまでの大学生活を時系列で考え、以下の問題点に着目した。

- (1) 教職員が個々の学生情報を把握しておらず、不登校状態である学生を早期に把握できない。
- (2) 学生個々が持っている学力や、意欲・目的意識に差がある。
- (3) 大学卒業3年後の離職率が31%と高いことから、必ずしも個々に合わせたキャリア支援ができていない。

(厚生労働省若者雇用関連データ 離職率に関する参考:<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/12.html>)

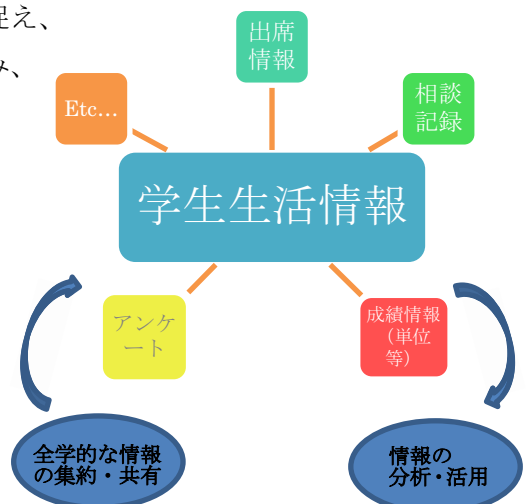
3. 解決策の検討

各部署の中でとどまっていた学生の生活情報*を全学的に共有する仕組みを作り、各部署で、適切に把握・参照し、個々の学生の支援につなげる。

また、集約された情報を分析することで、学生全体の傾向を捉え、これまで見落としてしまっていた課題や課題発生の前兆をつかみ、積極的なサポートを行う。

「学生情報を共有するシステムを導入すること」ではなく、一貫した情報を基に、セクションを超えた学生への支援を行うことに重点を置く。

*学生の生活情報：授業への出席状況、保健室や相談室への相談情報、様々なアンケート等、1人の学生が入学してから卒業するまで、日々変化する学生の状況を指す。



4. 具体的解決策（2.問題点の深堀 を具体例として）

（1）教職員が不登校学生を把握できていない。

→各部署での面談記録等のデータを共有することにより、学生が抱えている問題を多面的に捉え、適切かつ迅速な指導や相談、あるいは学生の問題に対して大学側から先手を打つことができる。（退学希望の兆候を早期発見・支援することにより、退学者減少につながる。）

（2）学生の学力や意欲・目的意識に差がある。

→過去の相談記録をデータベース化することにより、分析によって傾向を掴んだり、ロールモデルの提示が可能となる。これらを活用することにより、先輩より経験を踏まえたより身近な（学生に寄り添った）相談や支援ができる。

（3）個々に合わせたキャリア支援ができていない。

→各部署で保有している個人の学生生活の情報を集約することにより、その学生の専門や思考、適性などの背景を知ることが可能となり、その人に合わせたキャリア支援や指導ができる。

※大学が抱えている多くの情報を集約することで、学生に対しての支援や指導をスムーズ、且つ効果的に行うことができる。また、大学側が学生のニーズを素早く把握し、「受け身」ではなく、能動的な学生支援の実現が可能となる。

5. 大学のイノベーションの提案

（1）プロジェクトチームの結成

①各部署の職員が最低1人参加する。

→それぞれの「気づき」を持ち合うことで多角的な視点から問題の分析や解決に繋げる。

②職員に限らず教員や学生もメンバーとなる。

→新たな問題の発見や対応も可能となる。

③将来的に、第三者として外部の人（企業等）や卒業生等もメンバーに加える。

→さらに広い視野での対応が可能となる。

※学生の生活情報を共有するシステムを整えても、それだけでは効果的な対応には直結しない。

具体的に「誰が何をどう対応するのか」を明確にする仕組みが重要である。

（2）情報の収集から解決へのサイクルの構築

学生生活情報システムおよびチームの結成により、

①情報を収集し、

②それを共有することで、

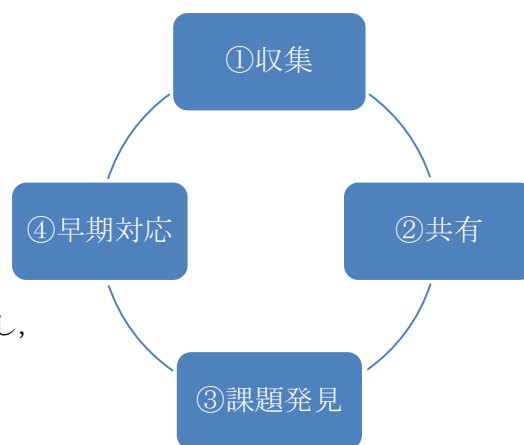
③問題や課題が浮き彫りとなり、

④それに対応・解決した情報がさらに蓄積されていく、

という1つのサイクルが完成する。このサイクルによって、

一人ひとりに合わせたオーダーメイド型の学生支援を実現し、

高度な人材の育成へと繋げていくことができると考える。



6. 成果と今後の課題

- ・学生情報には守秘義務データも含まれている為、取り扱いや運用方法について十分な検討と、各部署間や学生相談室等との一層の連携を強化していく必要がある。
- ・ICTの利活用を考える上で、建学の精神や理念を基に、どういう人材を育成したいか、学生のために何が出来るか（何をすべきか）を念頭に置くことが重要であることを再認識した。